

「まるでオランダから買った版画のようだ」と、ほめました。

そのころ、宇田川玄真うたがわけんしんというオランダ医学者がいました。オランダ学者のあいだで、玄真を知らない人はいませんでした。玄真は、オランダの医学書をほん訳し『医範提綱』いはんていこうという大切な本を出べんしました。

しかし、この本には、人間の体を切り開いて図にした解剖図かいぼうずがありませんでした。

玄真は、解剖図をつくるため、田善を自分の家によびました。その夜、田善はよくねむれませんでした。江戸のオランダ学者のなかまに加わるくわことは、とてもうれしかったからです。

田善が目をさましたのは、昼ちかくでした。いそいでしたくをすると、すぐに出かけました。その日は、とても暑い日で、田善はなんども、ひたいや首のあせをふきました。子どもをつれたお母さんも、みんなあせをふきふき歩いていまし